

我がまちに美術館を——いわき市民ギャラリー調査報告

太田紋乃

はじめに

いわき市民ギャラリー（以下、適宜「市民ギャラリー」と略す。）は、昭和51年に福島県いわき市において、事務局を市の文化センターに置き、美術関係者を中心とした市民らによって設立された団体である。解散から二十数年経った現在、当事者らの高齢化が進み、その存在は市民の記憶から薄れようとしている。市民ギャラリーの活動について、いわき市立美術館設立に密接に関係したことは例えば昭和59年の『いわき市の教育』（教育委員会発行）にあるように^{*1}公の事実として述べられてきた。しかしその具体的な内容の整理はまだ十分とは言えない。

日本では1970–80年代に、生涯教育の提唱等の時代的要因を背景とし、県制や市制の周年事業等の一環として、各地に公立美術館が建設された^{*2}。1984年に開館したいわき市立美術館に関してもその一端と捉えることができるが、とはいえ先例がそう多くない時代において地方の一都市で、戦後の現代美術を標榜する美術館が開館したことはいささか特殊な例である。その意味でも、美術館設立に貢献したとされるいわき市民ギャラリーが、どのような活動を展開したのかを検証することは必要な作業であろう。

1. 調査の現状

いわき市民ギャラリーは昭和51年に発足し平成9年まで存続した。展覧会や実技セミナー、著名な美術関係者を招いての講演会などを主な事業とし、加えていわき市に美術館を建設するというスローガンを掲げて研究会を設けるなど活動は多岐にわたった。昭和55年にいわ

き市立美術館の前身組織として設置された美術館準備室に着任した学芸員や、建設の準備段階に関わった外部の美術関係者らは、団体の活動を外側からであるが目の当たりにした。そのことから、当館開催のコレクション展、地元ゆかり作家の展覧会カタログへの寄稿で、当時の市民たちが並みならぬ熱意を持って活動を行い、行政がその成果に応じて美術館建設へ動いていった様子が振り返られている^{*3}。

他方、いわき市内の美術関係者の中では、当事者の声や記憶を記録に残そうとする動きもある。いわき駅周辺を拠点として平成26年から開催されている芸術祭「いわきまちなかアートフェスティバル玄玄天^{*4}」の実行委員会は、平成28年、29年に実施した芸術祭関連シンポジウム「いわき現代美術の系譜」に合わせて、当時を知る関係者への聞き取り調査を行った。その聞き取り調査の記録^{*5}、並びに、調査を基に実行委員会副委員長の木田修作氏が執筆したノンフィクション、「熱源～いわき市民ギャラリーとその時代」（第40回吉野せい賞準賞受賞作品、雑誌『風車』掲載）^{*6}は、当事者の証言を通して

^{*3} 当時を振り返るテキストとしては次が挙げられる。大島清次「私感：いわき市立美術館のコレクション」『モダニズムの至福のとき—いわき市立美術館名品展』図録、宇都宮美術館、2002年、12–13頁。谷新「いわき市立美術館の所蔵品と企画構成について」『モダニズムの至福のとき—いわき市立美術館名品展』図録、宇都宮美術館、2002年、18–22頁。佐々木吉晴「いわき市立美術館の20年—コレクション形成を中心として」『モダニズムの至福のとき—いわき市立美術館名品展』図録、宇都宮美術館、2002年、166–171頁。平野明彦「東京美術学校といわき」『藝大に学んだ巨匠たち』展図録、いわき市立美術館、2014年、104–109頁。佐々木吉晴「いわき市立美術館現代美術コレクションの形成とアメリカ美術」『いわき市立美術館名品展 アメリカ美術の力』展図録、碧南市藤井達吉現代美術館、2016年、8–13頁。

^{*4} 事務局はNPO法人Wunderground、ディレクターはいわき市在住の現代美術家吉田重信が勤める芸術祭。

^{*5} 「いわきまちなかアートフェスティバル玄玄天」実行委員会の厚意により当館に音声データの提供を受けた。聞き取り調査の内容の一部は、註6に挙げた資料に掲載され刊行されている。

^{*6} 木田修作「熱源～いわき市民ギャラリーとその時代」『風舎』第

^{*1} 『いわき市の教育』（昭和59年度）、いわき市教育委員会、42頁。

^{*2} 横山勝彦「公立美術館の時代 1970年代以降」『日本近現代美術史事典』東京書籍株式会社、2007年、413–414頁。

当時の様子を伝える重要な資料となっている。

また当館では令和2年に、当事者の一人、山崎保寿氏の協力を賜り、聞き取り調査及び氏が所蔵する資料の調査を行った。この山崎保寿氏所蔵資料群は市民ギャラリーの総会資料や会議資料を中心としており、これに相当するものは当館を含め公的機関にはほとんど残っておらず、非常に貴重な情報源になると見られる。

いわき市民ギャラリーに関しては以上のような記録や調査が為されてきた。これらを体系的に結びつけ、団体の全貌を明らかにすることが今後の課題として浮かび上がっている。以上を踏まえ、本稿は、市民ギャラリー誕生の背景となる当時のいわきの社会的環境を確認するとともに、これまでに行われた聞き取り調査や山崎氏所蔵資料から得られる情報を整理し、活動を時系列で俯瞰することを目指す。未入手資料も多いと推測されることから活動を完全に把握するものではないが、欠けている情報の洗い出しによって今後の調査の足掛かりとなることを期待する。

2. いわき市民ギャラリーの背景

政策的土壌

いわき市は、戦後の復興のため国が打ち出した産業政策の一環で誕生した自治体であった。昭和37年に閣議決定された全国総合開発計画では、復興の柱となる産業の復旧が急務とされ、かつ特定の場所への一極集中を避け、国土の均衡的な発展が目指された。そのための政策の一つが新産業都市計画である。工業発展の条件を備えた地域を新産業都市として指定し、交通基盤や用地の整備、企業の誘致を行い、地方の開発の拠点へと育成することを目的としたこの計画は、同時に指定を受けた地域に対して「一体的な建設を促進する為、関係市町村は合併により規模の適正化、組織運営の合理化に配慮」することを求めた。そこで指定を目指す現いわき市周辺地域では、新産業都市建設促進法が制定される前年の昭和36年から広域都市建設促進協議会が発足、近隣市町村による大合併に向けた協議が進められた。めでたく常磐・郡山地区が新産業都市に決定したのち昭和41年に、5市4町5村の合併によりいわき市が誕生する^{*7}。臨海に小名

浜港を有し、さらに京浜工業地帯との距離も近いいわきでは、工業団地の造成と大企業の誘致を中心とした政策がとられた。当地方は「勿来」という地名に残るように古くから東北と関東の境目であり、海浜と山間という異なる風土を擁し、漁業や産炭業を縁として他地域から人々が行き交う土地であったが、いわき市という市制それ自体も、異なるもの同士の境界を内在し、外部との往来を促す性質を持つものであったと言えよう。

新産業都市として産業の整備がある程度進むと、健康や文化へと視野が広がられる。昭和46年に発表した「いわき市開発総合計画」で、当時の市長、大和田弥一は、東北南部の一大産業拠点としてのいわき市を目指すとともに、市民福祉の向上を図るため人間尊重の精神に立脚した充実した人間社会の形成が課題であるとしている。その上で、社会教育施設については「美術、音楽その他現代市民が創作、発表展示を行い、芸術文化のレベルアップに大きな推進力とするため、文化会館（美術館）を建設する^{*8}。」という言及がなされている。国の新全国総合開発計画（昭和44年）、第三次全国総合開発計画（昭和52年）においても人々の健康で文化的な生活環境の整備が謳われたように^{*9}、この時期には文化的環境の拡充の機運が増していたのである。また、旧14市町村の上に成り立つ「あたらしいまちいわき」が安定して市政を行い発展していくためには市民の一体感や新たな郷土愛が不可欠であった。そのためにも、市民の精神的な交流の基盤となる文化環境が重要視されたであろうことは想像に難くない。

市民活動の土壌

終戦直後のいわき地方では、常磐の産炭業を軸として経済の立て直しが図られるとともに、人々の間における文化活動も徐々に再開された。美術に関して見れば、昭和20年の終戦の年に旧翼賛文化協会が磐城文化協会に改称、再発足したのを皮切りとして、翌昭和21年には旧制磐城中学の美術部「X会」のメンバーを中心とした同人会（後に新青会と改称）がいち早く結成し、当時の平市にあったマルトモホールでグループ展を行う他、都内

業の発展は他地域と比しても急務であった。以上、戦後のいわき地域の産業と政策については以下を参照。土谷幸久「産業政策の中のいわき（上）・（下）」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』第14号（2017年）、11-47頁。

^{*8} 資料編 引用1

^{*9} 『新全国総合開発計画』（昭和44年〔昭和47年増補版〕）、（『第三次全国総合開発計画』（昭和52年）。

12号（平成30年3月1日）、文藝風舎、149-193頁。

^{*7} 東北地方では一人当たりの国民所得が全国平均の73%にとどまっていること、人口の自然増分を補う雇用の確保が難しいことなどを背景に1957年に東北開発促進法が制定されており、産

の公募展への出品も再開している。このような市民有志による活動や、教員など学校関係者によるグループ展、常磐炭砒磐城営業所絵画部等を始めとする企業内サークルが、昭和20年代後半にかけて活発化した^{*10}。その間、常磐炭砒から無事故達成記念碑を依頼された彫刻家佐藤忠良が昭和27年にこの地を訪れたことを端緒として、東京の芸術家らが古河好間炭坑や小田炭坑へのスケッチ旅行を行うようになる。首都圏との近さを背景に、彼らのような外部との交流が後まで続いたこともいわきの美術界を刺激した^{*11}。

14市町村が昭和41年を境に「いわき市」という一つの新しい市へと移行するなか、公共施設については旧市町村で設置されたものが引き続き使用されていた。それに加えて市民の美術活動の重要な舞台となっていたのが民間の美術ホールや画廊である。前述のマルトモホールは、昭和5年頃マルトモ書店創業者の柴田徳二によっていわき市平四丁目に開設され、その後店舗の新装を経ながら戦後にかけて存続した。また昭和40年代前半に草野建によっていわき市平南町に開設された草野美術ホールは、存続した10年間に200回を超える絵画展を催し、いわゆるたまり場のような、制作活動をする市民たちのネットワーク形成の場となった。昭和40年代後半には他にも画廊喫茶「珈琲門」^{*12}やギャラリーすまい^{*13}な

ど、積極的に自主企画展を行うアートスペースが開設されており、市民の美術への関心が高まっていたことが推測される。

昭和44年、「旧市町村における活動の伝統を守りつつ、市全体の調和を図る」という目標のもと、いわき市文化団体連絡協議会（現在はいわき市文化協会に改称。以下「文連協」と略す。）が市内の95の文化系団体によって発足した^{*14}。いわき市教育委員会内に事務局を置いた文連協は、音楽、美術、工芸、伝統芸能など、幅広いジャンルの団体から成り、研修、親睦会などの他、市民芸術祭や県芸術祭などの行事を共に行い、研鑽と交流を深めていく。昭和50年にいわき市文化センター（以下「文化センター」と略す。）が開館すると、それまで旧市町村の施設を活動場所としていた文連協団体の新たな活動拠点として使われ始める。文化センターは、当時「文化の殿堂」とも称され、公民館、図書館、文化会館、視聴覚ライブラリーなどの機能を併せ持つ教育委員会所管の複合施設であった。「いわき市」を冠した大規模な文化施設の誕生は、各地域から活動のために集まる市民らにとって、「いわき市民」というアイデンティティを実感する契機の一つになったのではないだろうか。実際、いわき市民ギャラリーは文化センターを拠点として立ち上げられることになる。

市民ギャラリーを作りたい、ひいては市立美術館を作りたいという意識は市民の間にどのように芽生えたのだろうか。正確な時期や発信元を特定するのは難しいが、以下に例示したように、複数の場で同時進行に近い形でそういった意識が温められたものと考えられる。

萌芽の一つと考えられるのが、文連協の一員であったいわき美術協会という組織である。現在まで活動を続けるこの団体は、昭和20年代に勃興した美術系の市民サークルが合同で作品を発表する場を設ける目的で昭和38年に結成された組織で、長く会長を務めた若松光一郎は、東京藝大卒業後池袋モンパルナスにアトリエを構え、終戦とともに地元に戻り活動した、当時のいわきの美術界では中心的な画家であった。若松は、同じく美協会員であった鈴木邦夫と、昭和50年代のニュータウン事業とともに具体化した市立博物館構想の検討会議に美術分野の関係者として参加した。二人は同じく美協会員

^{*10} 明治10年から昭和62年までのいわきの美術界については以下に詳しい。「いわき美術年表」（平野明彦他編）『いわきの作家たち—いわきの美術シリーズ』展図録、いわき市立美術館、1987年。なお同人会から改称した新青会は、その後、「ユマニテ」、「いわき美術協会」へと組織を引き継ぎ、市民ギャラリー発足時の基盤となった。

^{*11} 佐藤忠良らの炭坑スケッチについては次に詳しい。『アトリエ』臨時増刊号（特集「新しいリアリズム」）、1956年、アトリエ出版社。また、佐藤忠良に記念碑制作を依頼した常磐炭砒社員山崎保寿が、後に自身が開廊したギャラリーで企画した次の展覧会の図録も、いわきと佐藤ら外部の芸術家との関係を知る上で参考となる。『つれだっといわきを描いた作家たち：1954年』展図録、すまいギャラリー、1983年。なお佐藤忠良はその後市民ギャラリーでの講演会やいわき市による美術館建設の諮問委員会に関わっている。

^{*12} 1971年に、佐藤忠繁によりいわき市平中央通りに開店。佐藤は後にいわき市平堂根町でギャラリー界限を設立。画廊喫茶「珈琲門」の活動については次に記述がある。木田修作「熱源〜いわき市民ギャラリーとその時代」『風舎』第12号（平成30年3月1日）、文藝風舎、160-161頁。

^{*13} 1974年に、常磐炭砒などを経て市内で建築事務所を営んでいた山崎保寿によっていわき市鹿島町に開廊。山崎が常磐炭砒時代に彫刻家・佐藤忠良に記念碑を依頼した事を縁として、佐藤忠良をはじめ中央の作家の個展を積極的に行った。山崎の活動については以下に詳しい。山崎保寿『東北のブルドーザー 美をみつめて50年』（私家版）、2000年。山崎保寿「私の半生」『福

島民友新聞』2003年4月25日-5月27日連載。

^{*14} 『三十年の歩み』いわき市文化団体連絡協議会、1998年。

の松田松雄に報告・相談をしつつ、会議で意見を述べて行ったが、行政との考え方の違いにより脱会、市立博物館構想もその後立消えとなってしまう。しかしこの出来事を経て、独立した市立美術館が欲しいという意識がいわき美術協会の仲間内で芽生えていたようである^{*15}。

もう一つ例示できるのが、文連協の会員と事務局との交友関係である。文化団体連絡協議会の二代目事務局を務めた市職員・佐藤英介が文化センター所属であり、会員らと親しい関係を築いたことから、文化センターは単なる活動場所であるのみならず意見交換の場となっていた。佐藤と主に議論を交わしたのが、前出のいわき美術協会の画家、松田松雄と、その友人である陶芸家の緑川宏樹である。彼らの意見として合致していたのが、いわきの文化のために何か仕掛けたい、いわきに「本物」の芸術を持ってきたい、というものであった。佐藤はそのきっかけとも言える印象的な出来事に、国立国際美術館の立ち上げ等に関わった美術評論家・村田慶之輔との会話を挙げている。昭和50年に文化センターで開催された「現代美術選抜展」（文化庁などが主催）でいわきを訪れていた村田が、市側の受入担当であった佐藤とともに訪れた近隣のデパートで、有名画家の小ぶりの作品に高額な価格がつけられていること、すなわち作品ではなく作家の名前を見て価格がつけられているとこぼす。その指摘を知った松田、緑川らの間に、いわきの文化の発展のため「本当に良い作品」を持ってきて市民に見せなければならないという思いが生じたのだという^{*16}。彼らは文化センターを舞台に、開発は進めど文化的目玉に乏しいいわきで何らかのアクションを仕掛けようと意気投合する。その内容として最も現実的であったのが、演奏会や演劇などと比べ準備がしやすく、市民に愛好者の土壌もある美術であった^{*17}。

佐藤によれば「市民ギャラリー」という組織づくりを最初に口にしたのは、行動派の松田松雄であったようだ。昭和38年、26歳の時に転勤で岩手県からいわきに

移り住んだ松田は、数年後に会社を辞め、一時若松光一郎に師事しつつもほぼ独学で画家となる。その後、東京出身で京都の前衛陶芸家集団「走泥社」の同人であり、昭和49年にいわきに移り住んだ陶芸家・緑川宏樹と知り合う。松田が市民運動や市立美術館の必要性を強く意識した背景には、東京や京都の経験を持つ緑川と親しくなり、芸術家が社会と関わることの重要性を認識したことも大きいという^{*18}。松田松雄、緑川宏樹は、前述の若松光一郎とともに市民ギャラリー発起人^{*19}に名を連ねており、とりわけ松田は、組織誕生後も中心的存在としていわば「キュレーター^{*20}」の立場を担った。松田、緑川が、時期は異なるがいずれもいわき市外からの移住者であることを考えると、人的交流の活発さやそれを受け入れる素地がいわきにあったことは、市民ギャラリー成立の要因の一つになっていると言えよう。

3. いわき市民ギャラリーの活動

山崎保寿氏所蔵資料

いわき市民ギャラリーでは毎年6月頃に総会を開催し、各部会の前年度事業報告と、当年度の事業計画の提案が行われた。この際に用いられた総会資料は、市民ギャラリーの活動内容を把握する上で重要な手がかりの一つである。

当館が令和2年に調査した山崎保寿氏所蔵資料^{*21}には発足時の昭和51年から、52年、53年、54年、56年、平成9年の総会資料が含まれていた。それ以外に、平成9年度の解散総会で配布されたと見られる「現在までに開催された展覧会及び講演会等」が、主な活動を知る上

^{*15} 鈴木邦夫の発言を参照。「座談会 松田松雄の足跡を語る」『うえいぶ』第14号（1995年1月）、いわき地域學會、65-66頁。

^{*16} 佐藤英介の発言を参照。木田修作「熱源〜いわき市民ギャラリーとその時代」『風舎』第12号（平成30年3月）、文藝風舎、171頁。

^{*17} 以上、市民ギャラリー揺籃期の様相については、木田修作「熱源〜いわき市民ギャラリーとその時代」（第40回吉野せい賞準賞受賞作品）『風舎』第12号（平成30年3月1日）、文藝風舎、149-193頁に詳しい。

^{*18} 緑川宏樹の発言を参照。「座談会 松田松雄の足跡を語る」『うえいぶ』第14号（1995年1月）、いわき地域學會、66頁。また、画廊喫茶「珈琲門」及びギャラリー界限のオーナーであった佐藤繁忠も緑川から松田への影響を示唆している。木田修作「熱源〜いわき市民ギャラリーとその時代」『風舎』第12号（平成30年3月）、文藝風舎、168頁。

^{*19} 発起人名簿には以下の15名が記載されている。若松光一郎（いわき美術協会）、上野英四郎（文化団体連絡協議会）、諸井時男（高校美術連盟）、瀬谷良男（中教研美術部会）、佐藤光（福島高専校長）、堀内敏男（共立病院医師）、草野健（草野美術ホール）、鈴木将夫（ギャラリー36）、鈴木正幸（大黒屋ブックス店長）、須藤照美（画廊喫茶マロン）、山崎保寿（K.K.すまい）、猪野利邦（いわき画廊）、市井勝昭（平青年会議所）、松田松雄（いわき美術協会）、緑川宏樹（陶芸家）※肩書は資料ママ。

^{*20} 当時美術館準備室に学芸員として着任した佐々木吉晴の言葉。木田修作「熱源〜いわき市民ギャラリーとその時代」『風舎』第12号（平成30年3月）、文藝風舎、149-193頁。

^{*21} 資料編 表1

で有効であった。山崎氏は昭和4年いわき市常磐に生まれ、常磐炭砒等を経て一級建築士の資格を取得、昭和46年に市内に山崎一級建築士事務所を構え、昭和50年からは事業の一環として「すまいギャラリー」を開業し地域の文化振興に携わってきた。氏は建築士、そしてギャラリーオーナーという立場で市民ギャラリー発起人に名を連ね、団体発足から2年後に設置された「美術館研究部会」の部会長となり美術館の建設に貢献する。このことから、山崎氏所蔵資料には美術館建設に関する資料も多く見られた。

上記の資料と、当館に所蔵があった昭和59年度総会資料、及び当時の新聞記事等の情報を基に作成したのが「いわき市民ギャラリー関連年表^{*22}」である。年表中の「市民ギャラリーの動き」では、総会資料がある年度とそうでない年度では情報量に差があるため、総会資料を入手できた期間とそうでない期間を色分けして示している。よって、情報量が少ない年度が、必ずしも活動量が少ないとは断定できない。

理念

市民ギャラリーは、昭和51年6月17日に文化センターで開催された「いわき市民ギャラリー設立総会」をもって正式に活動を開始する。設立総会資料の冒頭では、『「いわき市民ギャラリーとセミナー」設立提唱にあたって』という文章で団体の理念が表明されている^{*23}。文章によれば、いわき美術家協会^{*24}の発足、市民美術展の開催、いわき市文化センターの建設、草野美術ホールのような民間の活動など、これまでいわきでは行政や市民による地道な芸術振興活動が行われてきたが、「今日に至って、それが、もう一枚の飛躍に、質的な向上が求められて」おり、それは「昨年の文化センターにおける現代日本選抜美術展がおどろくほど盛況」であったことから、市民の強い関心事項であるという。その上で、いわき市民の美術に対する姿勢の現状と、必要なものについての見解が次のように述べられている。

すでに、当地方も、描き、眺め、楽しむ時代から、
各々の表現の質（内容）を問われる時代に移りつつ

あるものと思われる。全ての主要な美術展が大都市中心に行われ、地方の人々はその恩恵にあずかることはほとんど皆無とっていい。市民の将来にとってこれは非常に重大なことである。

多様な価値観と精神の豊かさのある人間性が問われる現代において、良い作品に触れる機会さえもないことは、全く悲しむべきことである。それは、また、多くの市民の手で作られた作品にも顕著に表れている。常に類例的で、多様性と内容に乏しいのが現状である。私共はこの様な状況を打破し、前進するためにも、また一般市民の精神の高揚と美術文化に対する関心を高めるためにも、「質の高い作品」を見る機会をもつことが何よりも重要であろう。…

「描き、眺め、楽しむ」すなわち技巧や見た目の美しさを問う時代が終わり、「各々の表現の質（内容）を問われる時代」、つまり美しさ以外に作品が表現するもの・作品に込められたメッセージが重視される時代となった、などと捉えることができようか。しかし当時のいわきは、筆者によれば後者のような作品に触れる機会は少なく、またそのために「常に類例的で多様性と内容に乏しい」。そこでいわき市民ギャラリーは、「このような状況を打破し」、多様性と表現の質を向上させることを目論んだ。

この文章から、団体の特徴がいくつか見て取れる。第一に、活動の主体が作家、つまり作り手であり、活動の目的を市民の表現活動の促進としている点である。これは市民ギャラリーの中心に居たのがいわきで活動した作家たちであることを考えれば自然な結果であろう。次に、創作者としての市民に価値観の多様性、言い換えれば個性を求めている点である。一人一人を尊重する姿勢は、活動内容の決定において、役職等に関係なく1人一票とし、過半数を以て決定とするというシステムにも通底する^{*25}。やはり活動の主体が作家であったことや、広域都市ゆえに内部の地域性が色濃いことなどが背景として考えられるが、ともあれ市民ギャラリーがこうした強い問題意識を掲げていたことは美術館建設を考える上でも確認すべき事項に思われる。

文章は、全国的なコンクール展、作家の育成のための「研究の場」や「セミナー」の必要性の主張へと続く。そして終盤では以下のように補足がある。

^{*22} 資料編 表2「いわき市民ギャラリー関連年表」

^{*23} 資料編 引用2『「いわき市民ギャラリーとセミナー」設立提唱にあたって』参照。佐藤英介への聞き取り調査によれば草稿は松田松雄による。

^{*24} 原文ママ。いわき美術協会（会長：若松光一郎）を指すと思われる。

^{*25} 『いわき市民ギャラリー設立総会』（昭和51年6月17日）の「いわき市民ギャラリー規約（案）」に記載。

ただ最後に、参加する作家自身に求めたいことは、このいわき市には、他の地方で見られる「中央の縮少版」[原文ママ]のような感情的に反目する動きがあつてはならない。それはみにくいことであり、そのようなエネルギーの拡散は、地方文化にとって大きなマイナス要因にしかならないと思う。

おのおの果たした歴史と存在を尊重し、世代の差をこえて手を取り、協力しあいながら、市民の期待に応える必要があろう。エネルギーは、むしろ一体となって中央（権威）との戦いにむけるべきである。そのためにも、おのおの作家が内容的に十分戦え、そしてこえられる力を持つことが何よりも先決である。…

「戦い」という言葉が繰り返される点に、中央に対する地方という構図が強く意識されていることが窺える。前述の部分と合わせれば、この宣言文に込められたいわき市民ギャラリーの理念は、市民に表現活動を助け、多様性を奨励し、地方都市いわきから堂々と美術を発信していくこと、とまとめられよう。

活動内容

次に「資料編 表2 いわき市民ギャラリー関連年表」に沿って大まかに活動を見て行きたい。まず目を引くのが、総会資料における事業報告を入手できた年の、年間の事業の充実度である。年によって変化があるものの、市民ギャラリーの活動は、展覧会、実技系の講座、そして講演会やスケッチ大会などの催しであった。設立時には事務局の他、展覧会部会、実技セミナー部会が設置されそれぞれに活動を行った。初年度には佐藤忠良と語る会（設立総会前に実施）、萩原英雄と語る会、'76福島現代美術展、103人が参加した裏磐梯スケッチ大会などが催された他、随時幹事会や役員会が開かれたと記載がある。翌年昭和53年度は展覧会の開催数が増え、美術館めぐりなど新たな催事も開催された他、美術館研究部会設立といった新たな事業も生じている。これらが、普段は別に職業を持つ会員らによって運営されていたことを考えると、活動の密度の濃さに驚かされる。

展覧会部会が担った展覧会事業は一般に団体をPRするという面もあり、団体の活動の目玉であった。入手できた展覧会名、会期、出品点数、入場者数は「いわき市民ギャラリー関連年表」に記載した通りである。地元福島の作家展から、新聞社が主催に加わる海外作品展まで

極めて多彩で充実した内容であることが窺える。入場者数を確認できた展覧会（昭和51年「'76年福島現代美術展」、昭和52年「斎藤清展」「ヘンリー・ムーア展」、昭和53年「ハハリ肉筆浮世絵コレクション北斎と広重をめぐる300年展」、昭和54年「ロダン展」、昭和55年「マンガン展」、昭和56年「クリムト展」）は、現在のいわき市立美術館の展覧会会期（およそ38日間程度）よりも総じて短いにも関わらず、入場者数は1万人前後と引けをとらない。昭和53年のヘンリー・ムーア展（22,224人）、昭和54年のロダン展（36,400人）の数字はなかでも突出している。最初の大きな展覧会となったヘンリー・ムーア展は、販売したチケット29,066枚のうち22,181枚を前売りとしてさばき、市民ギャラリー会員らによるチャリティー展を文化センター近くの大黒屋デパート（現存せず）の催事場で行い、絵画135点、陶芸14点を売り上げ、経費を差し引いた1,361,900円をヘンリー・ムーア展の資金に充当した記録が残っている。このヘンリー・ムーア展で市民ギャラリーの活動が一定の評価を受けることになる。会員らの懸命な努力で実績が形成されていったことが見て取れよう。

実技セミナー部会は、定期的に行うクロッキー講座や絵画中級講座、講演会、市民スケッチ大会等を主な内容として開始し、その後活動内容や組織が必要に応じて更新されていく。昭和52年度には美術館めぐりと裸婦写生会が追加される。昭和53年度総会資料では市民スケッチ大会と美術館めぐりを実技セミナー部会の会計から独立させるとの記述があり、その後の昭和55年度総会資料を見ると事業部会が新設され、市民スケッチ大会、美術館めぐり、美術講演会がそちらに移管され、実技セミナー部会は実技系の講座の実施のみに特化したようである。また、実技セミナー展（昭和53年度、出品81点、入場者614人）で受講者の作品を発表するなど、市民の研鑽の場として積極的な姿勢が見て取れる。

美術館建設への働きかけは、昭和52年度の総会時にスローガン「いわきに美術館を！」が採択されるのが最初の動きと見られる^{*26}。昭和53年6月に、具体的な美術館建設案を含む「いわき市総合計画^{*27}」が発表されるのと前後して、市民ギャラリー内では5月18日に美術館研究部会の設立準備会が行われ、6月28日の総会時に美

^{*26} 資料編 引用3

^{*27} 資料編 引用4

術館研究部会が新設される^{*28}。その事業計画には諸資料の収集、アンケート調査、研究座談会、市民へのPR、美術館空想（公募）展、そして美術館の要項作成などが挙げられた。昭和54年度総会時に報告された経過報告では、市民ギャラリー会長名による市長、教育長への陳情書「いわき市美術館建設調査研究費の市予算化について」の提出や、村田慶之助（国立国際美術館学芸課長）、瀬木慎一（美術評論家）、大島清次（栃木県立美術館副館長）を招いての3回にわたる研究座談会、そして山梨県立美術館への視察が報告されている。3回の研究座談会では、各講師から既存館の実情やいわきが目指すべき美術館像を聞き取り、性格、建物、作品収蔵、人事・運営、その他について比較表が作成されている。その中には、いわきにおける美術館建設運動を評価する声（村田「いわきの市民性優れている」、大島「いわき美術館—行政と市民が一体化している。すばらしい」）や、現代美術やいわきらしさを提案する声（村田「近代～現代美術収蔵」、瀬木「現代美術の啓蒙」、大島「いわきの美術館は他に前例のないユニークなものを創れ」）が見られる。市民ギャラリーや市の関係者にとって、彼らの声は励ましになるとともに、新美術館の方向性を決定していく上で参照源になったのではないだろうか。

55年度総会資料が欠けているため、54年度6月以降の事業報告を見ることができないが、54年度総会時の事業計画案では、美術館講習会（3回程度）、美術館研修会（1回程度）、いわき都市研究会への参加、展覧会事業を利用した美術館建設のPR、研究報告書の作成が盛り込まれている。

4. 美術館建設の動き

市民ギャラリーの活動は、いわき市側にとって、美術館建設の必要性を強く感じさせる出来事であったに違いない。昭和52年にタウン誌『Pebe』で松田松雄と対談した当時の市長、田畑金光は、いわき市民ギャラリーの活動に触れ、市民の文化への関心の高さを実感したこと、開催予定のヘンリー・ムーア展への期待、そして策定中のいわき総合計画で文化都市づくりへと重点を移すことを述べている^{*29}。実際に、昭和53年6月発表した「いわき市総合計画」で市は、二期にまたがる文化施設の建設

計画の前期に美術館建設事業を位置づけ^{*30}、美術館建設に向けて具体的に動き出す。昭和54年、市は「いわき市美術館建設基本構想委員会^{*31}」を設置、新美術館に求められる性格、規模、建設場所、資料収集と館活動、及び運営の基本方針について諮問した。この委員会には市民ギャラリーから若松光一郎、山崎保寿、松田松雄が参加している。同年8月に行われた市への答申「いわき市美術館建設基本構想^{*32}」の骨子作りには市民ギャラリー美術館研究部会長であった山崎らが中心に関わったという^{*33}。

続いて市は同年11月に「いわき市美術館建設審議会^{*34}」を設置、施設設備や運営方針についてより具体的な意見を求めた。市民ギャラリーからは引き続き、若松、山崎、松田が参加している。同審議会は、翌昭和55年9月の答申までに少なくとも7回の会議を持ち、さらに施設部会と管理運営部会に分かれて細かい話し合いを重ねながら、美術館の仕様や活動内容、収蔵方針について検討して行った。

昭和55年10月から学芸員として準備室に着任した佐々木吉晴によれば、収蔵方針については初期の段階から「新しいまちいわきのために既製の枠にとらわれない新しい美術を収集の核にしようという意見^{*35}」が強かったという。そのためか、昭和55年1月からすでに設置が進んでいたいわき市美術品選定委員会には、大島清次、

^{*30} 資料編 引用4

^{*31} 委員会には以下の6名が委嘱された。若松光一郎（いわき市民ギャラリー会長）、大島清次（美術評論家）、佐藤忠良（彫刻家）、田口安男（東京芸術大学助教授）、松田松雄（洋画家）、山崎保寿（いわき市民ギャラリー美術館部会長）。※肩書は資料ママ。

^{*32} 資料編 引用6・7

^{*33} 山崎保寿によれば、山崎保寿、松田松雄、そして教育委員会所属の市職員であった小島秀雄が骨子作成を担った。以下を参照。山崎保寿「私の半生」『福島民友新聞』2003年5月14日。

^{*34} 審議会には以下の20名が委嘱された。荒井光男（いわき市社会教育委員会議々長）、池田清（いわき市助役）、上野英四郎（いわき市文化団体連絡協議会々長）、柏木健三郎（国立福島工業高等専門学校々長）、北郷喜三郎（いわき美術協会事務局長）、小松三郎（画家）、佐々木一雄（書家）、四家啓助（いわき市議会文教常任委員長）、鈴木将夫（病院理事長）、高橋孝志子（建築家）、多賀重吉（いわき市議会建設常任委員長）、土屋文夫（デザイナー）、野木健男（いわき市都市研究会々長）、野崎理夫（いわき商工会議所会頭）、橋本勲（いわき市議会議長）、松田松雄（画家）、松本久（いわき市教育長）、馬目長雄（財団法人理事長）、山崎保寿（建築家）、若松光一郎（いわき市民ギャラリー会長）。※肩書は資料ママ。

^{*35} 佐々木吉晴「いわき市立美術館の20年—コレクション形成を中心として」『モダニズムの至福のとき—いわき市立美術館名品展』図録、宇都宮美術館、2002年、167頁。

^{*28} 資料編 引用5

^{*29} 「長靴対談 松田松雄のん・だもんだ」『IWAKIタウン誌 Pebe』第10号（1977年）、らんる社、18頁。

佐藤忠良、若松光一郎の他、たにあらた（美術評論家）、中原佑介（美術評論家）と言った当時の現代美術評論家が委嘱されており、昭和55年3月1日の第一回いわき市美術品選定評価委員会ではブリジット・ライリー、イヴ・クライン、フリーデンスライヒ・フンデルトワッサー、高松次郎、セザール、田淵安一、豊福知徳が選定の俎上に上げられている。委員会の人選や作品の提案を誰が行ったかが現時点では不明だが、審議会の最終的な答申を得る前にそういった動きがあったことは、市側としても現代美術路線を進める向きがあったことを示唆している。

ただし、昭和54年8月の「いわき市美術館建設基本構想」の時点では、「いわきは勿論のこと、国際的にも高度で、現代の目に耐えられる良質な近代美術を主とし、絵画、彫刻、工芸及び書等を系統的に収集する^{*36}。」と、近代美術が指向されている。その後、昭和54年11月の第一回建設審議会から昭和55年2月の第三回建設審議会までの間に行われた美術館視察で、山梨県立美術館、千葉県立美術館、浜松市美術館、栃木県立美術館、群馬県立近代美術館、神奈川県立近代美術館について、施設の特徴や特異的な館活動、収蔵品など15項目にわたって比較調査が行われた結果、第三回建設審議会で提出された意見では、「莫大に高価なものを収集する必要はない。ただし特徴を出す必要がある^{*37}。」という論調が生じる。昭和55年3月の第四回建設審議会では、過日の美術品選定委員会でブリジット・ライリー等が選定されたことが報告され^{*38}、さらに、同年6月28日に行われた建設審議会施設部会では、管理運営部会で出た意見として次のような意見が報告されている（一部を抜粋）。

- ・ 目玉の収集はやめた方がよい。（目玉をつくることは金がかかる）
- ・ 一般にもわかりやすいものがあればよい。
- ・ 最初はわからなくてもよい。わからせるのが学校教育であり、美術館のつとめである。それでないといつまでも美意識が高まらない。
- ・ 新しい感覚に対応することが大切である。

- ・ 近代の作品収集には金がかかる。そのようなものは企画展の開催で。
- ・ 現代美術は、生活そのものであり、今の人々が一番理解しなくてはならない美術だと思う。
- ・ まだ、現代美術については、他の美術館では、あまり収集していないので集めやすい。現代美術は幅が広く、抽象ばかりではない。
- ・ 県との競合は避け、いわきでなくては見られない作品を。
- ・ 基本構想委員会では現代の目に耐えられる良質の近代美術を主としてあるから、選定委員会で選定方針、収集方針をみなおす必要がある^{*39}。

以上のように、一度は近代美術路線を標榜したものの、建設審議会による他の美術館の比較調査によって、予算を最大限に活用すること、いわきとしての独自性を創り出すことの双方を発展的に乗り越える選択肢として、改めて現代美術収集路線の意義が確認されたことが見えてくる。その後収集方針は若干の修正を加えられ、最終的には「収集資料は、同時代性をもった戦後の良質な美術作品を対象とすることによって 特色を出す。すべての表現行為のうちから、今日の視点にたって秀れた美術作品を、いわきを含め、世界的視野から見て内容の高いものを収集し、将来に価値あらしめるべきである。^{*40}」という文章へと着地する。

市はこの建設審議会の答申を以て、美術館新築工事設計競技を実施、コンペを勝ち抜いた佐藤武夫設計事務所案による新美術館「いわき市立美術館」が、昭和56年に着工するのである。

まとめ

新産業都市計画の一環で昭和41年に誕生したいわき市は、14もの旧市町村の共存の上に成り立つ広域都市であり、産業の拡充を背景に外部から人や物が行き交う場所であった。また産業の整備が進むにつれ文化や健康と言ったソフト面へと視野が向けられた。旧14市町村から新市制に移行するにあたっては、市民が一体感を持つ契機をつくることが、自然と要請されたのではないだろうか。そのような状況の中、昭和50年に開館したいわき

^{*36} 資料編 引用7

^{*37} 『第三回いわき市美術館建設審議会』（昭和55年2月26日）資料

^{*38} 山崎氏所蔵の会議資料には「現代のタテ（戦後の現代美術）ヨコ（具象・抽象を問わず、内外のもの）」というメモが記されており、現代美術が収集対象として話題に上がっていたことが窺える。

^{*39} 『いわき市美術館建設審議会施設部会会議』（昭和55年6月28日）資料より一部抜粋。

^{*40} 資料編 引用9

市文化センターを舞台として、市民が中心となり行政がそれをサポートする形で、市民のための美術振興団体として生まれたのがいわき市民ギャラリーであった。設立には文化センター所属の市職員が関わっており、その後も事務局が文化センター内に置かれ、団体は行政と市民の協力のもとに成り立つ組織であった。

今回、山崎保寿氏への聞き取り及び所蔵資料調査によって、設立時の市民ギャラリーの組織体制や事業内容が浮かび上がった。市民ギャラリーの主な目的は、市民の表現活動の促進、かつ、表現における多様性、いわきの独自性を育成することであり、そのために海外巡回展を含む展覧会や実技セミナーなど多様な事業を展開し、市が美術館建設に踏み切るに十分な数字を成果として出したことも確認された。

新美術館建設への働きかけについては、「いわきに美術館を！」をスローガンに採択し、市の美術館建設計画に合わせて内部に美術館研究部会を設置、調査や勉強会を行い、市による新美術館建設の諮問機関には市民ギャラリーのメンバーが参加するなど、深く関わりがあったことが示唆された。特に美術館研究部会は、市立美術館建設における準備委員会の性質を有したように見受けられる。

一方で、今回の調査では昭和55、57、58、及び60年度以降の総会資料は入手できず、情報の偏りが顕著となった。また写真やチラシなど、文字資料以外の情報が乏しい。資料の収集を継続し、多角的な視点から情報の訂正も含めて調査を進めていくことが今後の課題となってくるだろう。

最後に、新美術館で採択された「戦後の現代美術」という収蔵方針は、限られた予算で最大限の効果（＝他館との差別化）を得るという戦略的な面があった。その方針は当時の美術館としては挑戦的であり、反対する声が無かったとは考えにくい。実際に開館後は収蔵作品に疑問を呈する投書などが相次いだという。しかし今回の調査を振り返ると、美術館設立の原動力となった市民ギャラリーの理念——今を生きる市民の表現活動へ刺激を与え、多様性を尊重するという姿勢——と、戦後の現代美術を収集するという方針は共鳴する部分もある。市が最終的に美術館の方針を固めるにあたって、いわき市民ギャラリーのような存在があったことの影響は看過できないのではないだろうか。その意味では、いわき市立美術館が今日まで一貫して掲げるこの方針は、美術館設

立の経緯と切り離せない、当館にとって重要な軸であると言えよう。

資料編

資料編では、本文で言及した資料の原文を掲載する。資料の多くは、現在では閲覧可能な場所が限られている古い文書や、会議資料、市民団体の内部資料であるため、将来的には可能な限り全てをデータ化し再録することが望ましい。しかし、今回は紙面の都合上、該当する項目のみを抜き出す。該当項目内の文章については全文を記載する。

【引用1】

『いわき市総合開発計画』（昭和46年10月）、136-137頁より「その他の社会教育施設」

(3) その他の社会教育施設

(現 況)

社会の急速な進展に適應するため、生涯教育の重要性が叫ばれ、同時に社会生活の多様化に伴い、社会教育施設の機能的分化と専門化が要望されている。いわき市は旧14市町村当時の施設をそのまま引き継いだが、発足後日も浅く、いまだこれを整備するまでに至らないのが現況である。今後は、早急に適地を選定して逐次計画的な施設の整備充実を図らなければならない。

(計 画)

ア 児 童 会 館

少年に夢と科学する心を与え、団体活動をととして社会生活を身につけさせるため、児童会館を建設し、同時に科学館を併設する。

イ 青 年 の 家

青年に共同生活と研修の場を与え、団体活動をととして仲間意識を深め、人間完成を図るため青年の家を建設する。

ウ 老 人 会 館

核家族化に伴う家庭内での諸問題の解決、しいては再就職に備えての職業的訓練の場として、老人会館を建設する。

エ 郷 土 資 料 館

原始、古代より現代に至るいわき市の正史、文化遺産、庶民生活を表わす資料、古文書記録などを保存するため郷土資料館を建設する。

オ 文 化 会 館

美術、音楽その他現代市民が創作、発表展示を行ない、芸術文化のレベルアップに大きな推進力とするため、文化会館（美術館）を建設する。

カ 博 物 館

地質、鉱物、動植物、その他海岸、気象、港湾、炭鉱などいわき市の特性を集中し、学問的研究と保存を図るため、博物館を建設する。

キ 少 年 自 然 の 家

自然環境の中で集団宿泊訓練を行ない、野外活動、自然探求等を通じて、規律協同、豊かな情操を養い、心身ともに健全な少年を育成するため、少年自然の家を建設する。

ク その他近代都市建設を目標とするいわき市は、その発展過程において、豊かな未来への創造を実現するため、必要な文化施設に対し、積極的に整備する。

【引用2】

『いわき市民ギャラリー設立総会』（昭和51年6月17日）資料より「『いわき市民ギャラリーとセミナー』設立提唱にあたって」

「いわき市民ギャラリーとセミナー」設立提唱にあたって

いわき美術界の現状を眺めるとき、十数年前の頃のことを思いだせば、隔世の感がある。文化の香りが全く感じられなかった時代に、有志によりいわき美術家協会が発足し、地道にその活動が続けるとともに、グループ活動を盛んにした。その活動は、昭和46年の市民美術展の開催をはじめ、昨年オープンした文化センター建設に果たした役割等々今日にまでおよんでいる。

一方、その間に、昭和43年草野美術ホールがオープンし、発表の「場」を市民に容易に提供することにより、この地方の文化活動に大きく道をひらく役目を果たしたことは衆目の認めるところであろう。しかし、今日に至って、それが、もう一枚の飛躍に、質的な向上が求められている。このことは、創作活動をする人達だけではなく、一般市民も高い関心を示している。それは昨年の文化センターにおける現代日本選抜美術展が、おどろくほど盛況で、市民の反響をよんだことでも充分理解できることである。

すでに、当地方も、描き、眺め、楽しむ時代から、各々

の表現の質（内容）を問われる時代に移りつつあるものと思われる。全ての主要な美術展が大都市中心に行なわれ、地方の人々はその恩恵にあずかることはほとんど皆無とっていい。市民の将来にとって、これは非常に重大なことである。

多様な価値観と精神の豊かさのある人間性が問われる現代において、良い作品にふれる機会さえもてないことは、全く悲しむべきことである。それは、また、多くの市民の手で創られた作品にも顕著に表われている。常に類例的で、多様性と内容に乏しいのが現状である。私共はこの様な状況を打破し、前進するためにも、また一般市民の精神の高揚と美術文化に対する関心を高めるためにも、「質の高い作品」を見る機会をもつことが何よりも重要であろう。幸い現在の市民の関心の盛り上がり背景に、市民が自主的に参集し、自らの手で作品を選び、企画運営する「ハイレベルの美術展」が実現されたなら、地方文化にもっと大きな発展が約束されるであろう。

また、将来全国各地にでき、それらと提携することで、市民が、より容易に内容のある作品をみる機会も多くなるであろうし、さらに、いわき市民自らの手で選んだ全国的な規模のコンクール展を行なうことも可能である。

作家の育成について考えると、各種の団体や個人が、おのおの独自の立場から活発な活動が続けてはいるが、しかしその中の各自が、より高い創造性（表現）を求めて苦悩していることもまた事実である。私共はそのような人々に何らかの手助けができる研究の場が必要であると考えます。

それぞれの存続と活動の独自性を尊重しながら、一市民として気軽に、自由に研究に参加することができるような「ひらかれたセミナー」としての開講が望ましい。このセミナーの設立は前述の仮称「いわき市民ギャラリー」とは表裏一体の役目を果たすことはいうまでもない。

ただ最後に、参加する作家自身に求めたいことは、このいわき市には、他の地方で見られる「中央の縮小版」のような感情的に反目する動きがあってはならない。それはみにくいことであり、そのようなエネルギーの拡散は、地方文化にとって大きなマイナス要因にしかならないと思う。

おのおの果たした歴史と存在を尊重し、世代の差をこえて手を取り、協力しあいながら、市民の期待に応える必要がある。エネルギーは、むしろ一体となって中央

(権威)との戦いに向けるべきである。そのためにも、おのおの作家が内容的に十分戦え、そしてこえられる力を持つことが何よりも先決である。基本的には、作家は作品によってしか問われないのであり、そのことに命をかけるべきである。また、すぐれた作家は存在していることそのものに意味があることも認識すべきであろう。

地方作家にとっては、文化の向上とか運動は遊びではなく、また論ずることでもない。根強く、実際に自らが実践し、生きることである。それは、一市民である草野健氏(草野美術ホール)の果たした役割によっても明らかである。

これからの人は地方の文化が低いとか高いとかの責任を他人に求めてはならない。むしろそれは、過去を問うなら自分の肉親に向けて問うべきであり、現在を問うなら自分自身に対して問うべきである。

【引用3】

「いわき市民ギャラリー スローガン『いわきに美術館を!』採択に当って」『いわき市民ギャラリー』第11号(昭和52年8月11日)、市民ギャラリー事務局。

いわき市民ギャラリー スローガン「いわきに美術館を!」採択に当って

いわき市民ギャラリーが発足して、1年が経過致しました。この間開放された実技セミナーを初めとして、様々な活動が行われました。特に76福島現代美術展は短期日の開期にもかかわらず約1万名の入場者を数えることが出来ました。今後にもいろいろの問題が残されたにしても一応の成功と見てよいのではないかと思います。これは市民の間に芸術、美術文化の意識がとみに高まっているためと思います。

私共は、更によりよい状況が生まれることと、一段の飛躍を願ってやみません。そのためにも、6月の市民ギャラリー第2回総会において、いわき市に美術館を設立しようとする運動を、いわき市民ギャラリーのスローガンの1つに採択いたしました。

このことは、これからの市民ギャラリーの活動をすすめて行くうえで非常に有意義で、かつ、だれにでもわかる明確な目標になるからであります。こんにち全国各地に国立の美術館を初めとして、公の美術館等が設立される趨勢にあります。しかしそれらの多くは、性格のあ

いまいさから、文化のシンボル、象徴としての美術館に終っているように見受けられます。私共は、そのような役割りだけのものにおちないように[原文ママ]、市民の生活の中で果す美術館活動がきわめて重要な役割を担うと言う考えで、美術館設立の運動をすすめるべきであると思います。したがって私共市民ギャラリーの役割は市民生活の中における美術文化の果す意味の認識が高まることを願い、現在のような活動を継続的に積みかさねて行くことであると思います。近い将来、市民にその意味が理解され、美術館設立に至るであろうと信じるものです。今日の自分達のためだけでなく、未来につながる人間の問題として捉えるべきでしょう。幸い、いわき市も皆様方をはじめとする様々な分野の人々の活動により、次第に街の様相を変えようとしております。その熱意の高まりが各方面に大きな反響をよびおこしつつあります。

これからも、又、皆様には文化を自分の問題と考え、いわき市民ギャラリーの活動に一層の御協力を願うものです。

松田松雄

【引用4】

『いわき市総合計画』(昭和53年9月)、141頁より「施設の整備」

7. 施設の整備

- (1) 史跡白水阿弥陀堂境域復元整備事業を推進する。
- (2) 埋蔵文化財の発掘調査と出土品の収蔵及び各種考古資料、炭鉱関係資料、農具・漁具その他の民俗資料等の系統的収集と保存、並びにそれらの学問的研究の拠点として、博物館の建設促進を図る。
- (3) 鑑賞、展示、創作など市民の芸術活動の拠点として、美術館の建設を図る。
- (4) 気軽に音楽を演奏、鑑賞できる場として、野外音楽堂の建設を図る。

〈主な建設事業計画〉

事業名	事業主体	計画概要
美術館建設事業	市	(前期) 鉄筋コンクリート2階建 2,000㎡
博物館建設事業	市	(後期) 鉄筋コンクリート2階建 7,000㎡

【引用5】

『いわき市民ギャラリー総会』（昭和53年6月28日）資料より「美術館研究部会設立にあたって」

1. 美術館研究部会設立にあたって

いわき市民ギャラリーは51年6月に「いわきに美術館を」をスローガンとして提唱推進して参りました。市でも「文化の香り高い街づくり」をかかげ総合計画の中に市立美術館建設を56年度までに完成する方針を発表しました。

このような重要な時期に当り、わたくしたち市民ギャラリー会員は建設から運営まで文字通り、市民の手による市民のための美術館を創るため充分な資料の収集と綿密な調査研究を進めなければならないと考え、この度、当市民ギャラリーに新たに美術館研究部会を設け、これら目的達成のため努力するものであります。

2. 「美術館研究部会」構想

1) 目的

市民生活に密着した美術館とし常設展、企画展及び美術資料美術作家の研究調査、資料の収集保存、美的な環境の中での教育学習の場とするため調査研究を行う。

2) 名称

仮称 美術館研究部会

3) 事業

美術館建設及び運営に関する諸資料の収集、アンケート調査、研究座談会、市民へのPR、美術館空想個展（公募）及び美術館の要項作成など。

【引用6】

『いわき市美術館建設基本構想—昭和54年8月28日答申—』（いわき市美術館建設基本構想委員会、昭和54年）より「いわき市美術館建設基本構想」

いわき市美術館建設基本構想

今日のいわき市の芸術文化的諸活動は、まことに目覚ましい発展を遂げつつある。

特に、美術文化は、十数年前のことを思い起せば隔世の感がある。文化の香りの全く稀薄な時代に、有志により「いわき美術協会」が発足し、以後着実な活動をつづけて来た。

一方、昭和43年に市民の手による美術ホールがオープンし、市民に容易に発表の場を提供することとなり、美術のみならず、映画、演劇活動等、この地方の文化活動に大きく道を拓く役割を果たした。さらに昭和44年には、各種の文化団体が結集し、文化団体連絡協議会を発足させ、市民のかくれた生活文化の発酵を醸成してきた。その成果として、いわき市の文化を高めるための切実な市民の声が結実し、昭和50年に「文化センター」が設立された。その後は、同センターが市民の文化活動の拠点となり、その果たしてきた役割はきわめて大きい。そのような状況の中で市民が次第に良質の芸術文化に高い関心を示してきたことは、各種の文化的行事を通して顕著にうかがえる。美術に対する関心を中心として、各々の地元作家の作品の質を問うまでに至っている。

市民の精神の高揚と美術文化に対する関心の高まりは、さらに市民の創造活動を活発化し、高い創造性を育成すべく、市民みずからの手により、昭和51年、全国にも例のない美術振興団体「いわき市民ギャラリー」が発足した。それが市民の熱意に支えられ、さまざまな活動（実技セミナー・講演会・美術展・スケッチ大会等）を積極的に続けて、昭和53年には、市民ギャラリー第3回展として、世界の巨匠「ヘンリー・ムーア展」を全国に先がけて開催し、前例のない盛況をおさめ、市民の反響をよんだことはなお記憶に新しい。さらに、あらたに第5回展として、昭和54年秋には、ロダン展を開催するまでに至っている。市当局もこのような市民の文化活動に呼応して、その都度その活動を盛り上げて来た。

人間をとりまく環境は年々きびしくなっている。自然が破壊され、また人々は、管理社会的な日常の中でとかく疎外されがちな生活を営んでいる。一方、それに対するアンチテーゼとして、物質的な生活から精神的なうらおいのある生活へと個々人の価値観が次第に変わりつつあり、人々が芸術文化にうらおいと豊かさを求めようとするのも当然の趨勢となってきた。こうして美術文化は、かつてのように一部愛好家だけのものではなく、すでに市民すべてのものとなりつつある。

ひろく文化は、市民の日常生活そのものといってよく、また市民と密着した行政の中にこそ文化に対する深い認識と理解が求められるべきである。それが豊かな市民性を身につけ、住みやすい環境をつくることにもなり、また現代社会の中で最も欠如している良き情操を育てることにもなる。本来、文化は人間を創る原点のはず

である。

文化の重要性がさげばれながら、国にあっても、地方にあっても、これまではとかく軽視されがちであったのが実情であり、特にこのことについては行政の立ちおくれを指摘せずにはいられない。なぜなら、経済合理主義的行政には「物の尺度」はあっても、「心の尺度」がなかったからである。

一方国内で行われる美術展の開催状況を通観すると、主要な美術展は大都市中心に展開され、近年その度合がますます多くなってきた。また、設立される諸施設（美術館等）も同様で、大都市（県庁所在地を含めて）に集中している。地方の人々がそれらの恩恵にあずかることはまれである。特に、いわきの場合は、文化的にも地理的にも特異な条件下にあり、また、県庁所在地からもはなれているためそれが一層顕著である。

多様な価値観の中で精神の豊かさと潤いのある人間性が問われる現代において、この状態は市民とその未来にとって大きな問題である。この状況を打破するためには、市民自らの力で考え、行動し、新しい文化と環境を創造しなければならない。芸術文化や環境は、大人が子供に遺産として遺すべきものの中で最も重要なものであり、まずもって美術館はその典型的ないい例といえる。

いわきは若いまちである。市民のエネルギーと行政による条件整備が一体となった創造性が期待され、いままさにそれが、心のやすらぎと美的環境づくりによって具現化されようとしている。美術館を求めている市民の情熱と創意を結集し、美的環境づくりの拠点たらしめ、それを核とし、他の文化領域の発展にも影響を及ぼしながら、豊かな人間都市を創ろうとしている。それを志向する美術館は、これをまちづくりの未来への遺産と考えるならば、行政のありようも、また、まちの姿も変わらざるを得ないし、人々のこのころも見つめる目も変わっていくであろう。さらに美術館活動の延長として、この地方に内外の作家がすすんで集まり、活発な創作活動を展開する美術活動センターや美術学校を設立することも今後の展望としてもつことは有効であろう。このように新しい私たちのいわき市にふさわしい価値ある施策であって、市民の美術館建設に寄せる情熱に裏打ちされたすばらしい行政のとりくみ方といっていいであろう。

当地方は、常磐自動車道等道路網の整備をはじめとして、都市の核としての「いわきニュータウン」の開発及び工業団地の造成など80年代の新しい都市へ向けて大

きく飛躍しようとしている。このような、地理的経済的都市基盤の整備をよりいっそう潤いと喜びに満ちた厚みのあるものとするためにも、美術館を発足させこれを有効に機能させなくてはならない。そのことによって、市民の生きがいを生み、若い有能な人々が定着し、ここふるさとを基盤として活躍するとともに、心の観光資源としても多くの人々を誘致することが期待できよう。その線にそって博物館も同じようにいわき市の魅力を形成する相乗的な要素となることは間違いない。

こうして美術館は、形が存在をこえて、人間の生き方とよこびと、さらに、この地方都市のゆたかさを生み出す原動力となることができる。

【引用7】

『いわき市美術館建設基本構想一昭和54年8月28日一』（いわき市基本構想委員会、昭和54年）、4頁より「資料収集と館活動」

4. 資料収集と館活動

美術館は、美術品を媒介とした作家と鑑賞者との人間的な出会いの場であり、その活動の成否は、美術品の質と量、加えて優れた学芸員による企画展示の如何によるものであることに留意する。

(1) 資料収集

いわきは勿論のこと、国際的にも高度で、現代の目に耐えられる良質な近代美術を主とし、絵画、彫刻、工芸及び書等を系統的に収集する。

(2) 館活動

イ. 調査研究活動

優れた学芸員により、広く日本国内外の美術の調査研究を行ない、資料の解説書、図録及び研究報告書等の刊行を行なう。

ロ. 収集保存活動

基金を設けて計画的に美術品の収集を計るとともに、これが受け入れ手続きにあたっては、専門的な評価委員会等による十分な審議を経るものとする。また、美術品の保存にあたっては、保存技術の習得、設備の面で遺漏のないようにする。

ハ. 普及教育活動

(ア) 高度で良質な美術品の常設展示と、漸新でかつ未来に資する企画展により、市民の美的情操の育成をはかる。

- (イ) 講演会、鑑賞会、研究会、実習講座及びパー
ホームンス（芸術的催し物）等の開催により、
市民への普及教育活動を行う。

【引用8】

『いわき市美術館の建設について（答申）—昭和55年9月26日—』（いわき市美術館建設審議会、昭和55年）、1-2頁より「はじめに」

1 はじめに

美術館建設審議会は、「いわき市美術館建設基本構想」に示された構想を高く評価し、それを基本として構想を具体化するための内容について検討を重ねてきた結果、本答申を得るに至った。

最も大切なことは、美術館は、市民共有の心の財産として、市民のためにひらかれた美術館であることが、まず前提である。そのことによって、市民に愛され、市民に支えられる美術館になるであろう。

さらに、美術館は、いわき市固有の特色を生かした地域美術館の役割を果たしながら、かつ世界的な視野に立つことを目指すべきである。特に、広域都市のなかにおける美術館であることに留意し、館内部の活動にとどまらず、市全体に美術があふれ、市民すべてが美術を楽しむ環境をつくりだす中核として、美術館を位置づけるべきである。それを「都市の美術館化」と呼びたい。

また、芸術文化に対する市民の理解を一層広め、かつ深めるために、その性格は、質の高い芸術を市民のものにする美術館でなければならない。したがって、市民に対する教育普及活動は、美術館と市民を結ぶために不可欠の要素であり、重視しなければならない。これらの社会とそこに生きる市民のありようが今日ほど問われている時代はなく、また、それを考える時、社会教育及び学校教育の中で、美術館の果す「原文ママ」「見る・触れる・読む・聴く・創る」等の教育普及活動に大きな期待が寄せられることは、当然といえよう。

基本構想にうたわれてるように、創造性ある豊かな市民性はもとより、人間を創る原点として文化をとらえ、美術館は、それを受けて豊かな環境をもつ都市の創造につながるという展望のもとに活動すべきである。

【引用9】

『いわき市美術館の建設について（答申）—昭和55年9月26日—』（いわき市美術館建設審議会、昭和55年）、5-6頁より「資料収集と保存」

6. 資料収集と保存

基本構想に掲げた資料収集の方針としては、「良質な近代美術を主とし」ということであるが、この場合価値の定まった近代美術に多額の投資をすることが地方美術館の正しい方法であろうか。むしろ、価値の可能性を内在し、しかも現在のわれわれに問いかける内容をもつ現代の美術に目をむけるべきであろう。そのためにも、生活そのものの美術として、今日的美術と前向きに取り組む姿勢が大切である。かつまた、それを素材として広く美術そのものについて、市民の理解を積極的に広めていく活動にこそ主眼を注がねばならない。資料収集は、そのための手段である。

- (1) 収集資料は、同時代性をもった戦後の良質な美術作品を対象とすることによって特色を出す。すべての表現行為のうちから、今日の視点にたって秀れた「原文ママ」美術作品を、いわきを含め、世界的視野から見て内容の高いものを収集し、将来に価値あらしめるべきである。
- (2) 現代の美術を理解し易くするため、それを生んだ近代美術をも流れの一部として収集するか、企画展示活動、ビデオ、写真、文献等で補完することは大切なことである。
- (3) 美術作品としての一次資料を説明するに適した二次資料（デッサン、エスキース、文献等）も積極的に収集すべきである。
- (4) 上記の資料収集にあたっては、専門家による選定委員会を組織し、厳正な審査を行うべきである。
- (5) 資料の寄附については、館の収集方針に合致するよう、厳正に審査したものに限り受入れる。
- (6) 収蔵庫の計画にあたっては、収蔵品の増加量が予測を大きく上回る事例が多いことを十分考慮し、保存収蔵庫をふくめ、将来増「原文ママ」についての長期的計画をたてる必要がある。
- (7) 簡易的な修復に関しては、館内で処置できるよう設備の配慮をすること。

（おおたあやの いわき市立美術館主任学芸員）

表1 山崎保寿氏所蔵いわき市民ギャラリー関係資料目録

[]内は編集による加筆。

件名	分類	開催／発行時期	主な情報
いわき市民ギャラリー設立総会	会議資料	昭和51年6月17日	・「いわき市民ギャラリーとセミナー」設立提唱にあたって ・「いわき市民ギャラリー」構想（案） ・いわき市民ギャラリー規約（案） ・昭和51年度事業計画（案） ・昭和51年度収入支出予算（案） ・いわき市民ギャラリー発起人 ・いわき市民ギャラリー第1回事業 ・いわき市民ギャラリー実技セミナー部会クロッキー講座実施予定表 ・第1回福島現代美術展開催にあたって ・第1回福島現代美術展－福島県在住・出身者－
76福島現代美術展の反省及び決算報告について	通知書	昭和51年12月21日	
『いわき市民ギャラリー』第7号	会報誌	昭和52年2月2日	
いわき市民ギャラリー総会	会議資料	昭和52年6月28日	・昭和51年度事業報告 ・市民ギャラリー会費51年度決算報告 ・いわき市民ギャラリー展覧会部会収支決算書 ・実技セミナー部会51年度決算報告 ・昭和52年度事業計画（案） ・市民ギャラリー会費52年度予算（案） ・斎藤清の歩み展予算 ・実技セミナー部会52年度予算（案）
『いわき市民ギャラリー』第10号	会報誌	昭和52年7月5日	スローガン「いわきに美術館を！」採択の報告
『いわき市民ギャラリー』第11号	会報誌	昭和52年8月11日	・斎藤清の歩み展にあたって ・いわき市民ギャラリースローガン「いわきに美術館を！」採択にあたって
ヘンリー・ムーア展打ち合わせ	会議資料	昭和52年11月4日	・ヘンリー・ムーア展開催要項（案） ・ヘンリー・ムーア展予算
ヘンリー・ムーア展打ち合わせ	会議資料	昭和53年1月6日	・オープニング・パーティー招待者名簿（案） ・ヘンリー・ムーア展事業分担
ヘンリー・ムーア展入場者数	入場者数資料	昭和53年2月	ヘンリー・ムーア展入場者数
第1回美術館めぐり	催事チラシ	昭和53年3月19日	第1回美術館めぐり 美術館めぐり参加者名簿
いわき市民ギャラリー総会	総会資料	昭和53年6月28日	・昭和52年度事業報告 ・市民ギャラリー会費52年度決算報告 ・昭和52年度展覧会部会収支決算 ・昭和53年度展覧会部会収支予算 ・斎藤清の歩み展収支決算書 ・ヘンリー・ムーア展収支決算書 ・ヘンリー・ムーア展基金チャリティ展収支決算書 ・ヘンリー・ムーア展記念講演会収支決算書 ・実技セミナー部会52年度決算報告 ・昭和53年度事業計画（案） ・菱沼儀・遺作展〔展覧会チラシ〕 ・ハラリー・コレクション「肉筆浮世絵300年展」収支予算（案） ・市民ギャラリー会費53年度予算（案） ・実技セミナー部会53年度予算（案） ・いわき市民ギャラリー規約 ・美術館研究部会設立にあたって
『いわき市民ギャラリー』第17号	会報誌	昭和54年1月26日	

いわき市民ギャラリー総会	会議資料	昭和54年6月29日	昭和53年度事業報告 ・昭和53年度いわき市民ギャラリー収支決算書（総括） ・昭和54年度市民ギャラリー各部会繰入額 ・市民ギャラリー会費53年度決算報告 ・昭和53年度展覧会部収支決算 ・昭和53年度実技セミナー部収支決算書 ・昭和53年度美術館研究部収支決算 ・ハラリー・肉筆浮世絵コレクション「北斎と広重をめぐ る三百年展」収支決算 ・浮世絵展図録収支決算 ・浮世絵展記念講演会収支決算 ・昭和53年度市民ギャラリー美術館研究部経過報告 ・美術館研究部講師別指導内容 ・昭和54年度事業計画（案） ・市民ギャラリー事務局54年度予算（案） ・実技セミナー部54年度予算（案） ・美術館研究部54年度予算（案） ・ロダン展収支予算（案） ・ロダン展図録及び記念講演会収支予算（案） ・ロダン展組織委員会名簿
第3回いわき市美術館建設基本構想委員会	会議資料	昭和54年7月27日	・いわき市美術館建設基本構想 ・性格、規模と形状、建設場所… ・総延床面積から見た展示室の割合
美術館研究部会開催について	通知書	昭和54年9月25日	
タイトルなし（いわき市美術館建設基本構想の下書き）	手稿	不明	
いわき市美術館建設基本構想（答申）	答申	昭和54年8月28日	
いわき民報記事「わがマチ “いわきの美の再発見” 他市注目のロダン展 多くの企業も開催に協力	新聞記事	昭和54年10月24日	
第1回いわき市美術館建設審議会	会議資料	昭和54年11月16日	・経過報告 ・基本構想の答申について [かがみ文] ・いわき市美術館建設基本構想一昭和54年8月28日答申一 ・いわき市美術館建設基本構想委員名簿 ・いわき市美術館建設審議会条例について ・諮問事項 いわき市美術館の建設について ・協議事項 今後の日程について ・いわき市美術館建設審議会委員名簿
第3回いわき市美術館建設審議会	会議資料	昭和55年2月26日	・報告事項 美術品選定委員会の設置について いわき市美術品選定委員会設置要綱 ・協議事項 美術館視察にもとづく内容の検討について 美術館を見学しての感想 [美術館比較表]山梨県立美術館、千葉県立美術館、浜松市 美術館、栃木県立美術館、群馬県立近代美術館、神奈川県 立近代美術館 美術館を見学しての感想（野木建男）
第1回いわき市美術品選定委員会	会議資料	昭和55年3月1日	・経過報告 いわき市美術品選定委員会設置要綱について いわき市美術品選定委員名簿 [手書きの作品リスト]
美術に関する懇談会	会議資料	昭和55年3月11日	

第4回いわき市美術館建設審議会	会議資料	昭和55年3月31日	・報告事項 美術品購入について 学芸員の採用について 敷地の確保について ・協議事項 建設の場所、施設の規模について 建設地図面 総延床面積から見た展示室の割合 美術館調査表 「美術館建設場所について」[筆者不明]
いわき市美術館建設審議会施設部会	会議資料	昭和55年6月28日	1.建設敷地と環境、2.施設の規模等、3.施設の内容、4.基本設計の進め方 ・管理運営部会で出された意見
いわき市美術館建設審議会施設部会	会議資料	昭和55年7月10日	1.建設敷地と環境、2.施設の規模等、3.施設の内容、4.基本設計の進め方 ・参考面積表 ・答申 ・建設地図面
いわき市美術館建設審議会施設部会	会議資料	昭和55年7月24日	1.建設敷地と環境、2.施設の規模等、3.施設の内容、4.基本設計の進め方 ・総延床面積から見た展示室の割合 ・美術館調査表
第5回いわき市美術館建設審議会	会議資料	昭和55年8月18日	・報告事項 管理運営部会で出された意見 施設部会で出された意見 ・答申に関する資料
第6回いわき市美術館建設審議会	会議資料	昭和55年9月2日	いわき市美術館建設について（答申）
第7回いわき市美術館建設審議会	会議資料	昭和55年9月10日	修正案
いわき市美術館新築工事設計（基本設計案）競技説明書	競技説明書	昭和55年	・仕様書 ・いわき市美術館新築工事設計（基本設計）競技内部施設一覧表 ・いわき市美術館新築工事設計（基本設計）質疑回答書 ・工事費の構成 ・審査重点項目
「わたしたちが描く夢の美術館」展出品作品の審査について	依頼状	昭和55年12月22日	教育委員会から山崎保寿氏への、小中学生による美術館完成予想図の展覧会「わたしたちが描く夢の美術館」展における作品審査の依頼。
いわき市美術館建設基本設計審査委員会	会議資料	昭和56年1月8日	いわき市美術館建設基本設計審査委員会設置要綱
いわき市民ギャラリー総会	会議資料	昭和56年6月29日	・昭和55年度事業報告 ・昭和55年度いわき市民ギャラリー収支決算（総括） ・昭和56年度いわき市民ギャラリー各部会繰入額（案） ・昭和55年度事務局収支決算 ・昭和55年度展覧会部会収支決算 ・マンガン展収支決算 ・昭和55年度実技セミナー部会収支決算 ・昭和55年度美術文化振興基金収支決算 ・昭和55年度市民ギャラリー事業部会収支決算 ・会計監査報告 ・昭和56年度事業計画（案） ・昭和56年度事務局収支予算（案） ・昭和56年度展覧会部会収支予算（案） ・クリムト展収支予算（案） ・昭和56年度実技セミナー部会収支予算（案） ・昭和56年度事業部会収支予算（案） ・昭和56年度美術文化振興基金収支予算（案） ・備品の寄附について
いわき市美術館設計の説明会	会議資料	昭和56年10月19日	・いわき市美術館建設設計概要 ・工事行程表
83福島現代美術展	展覧会チラシ	昭和58年11月21日－11月30日	

『6号線』84年19号	雑誌	昭和59年	・生誕百年記念特集 いわきにとっての山村暮鳥 ・いわき市立美術館の誕生
いわき市民ギャラリー役員会	会議資料	平成9年8月24日（日）	・解散宣言 ・現在までに開催された展覧会及び講演会等
いわき市民ギャラリー総会	会議資料	平成9年10月24日	・平成9年までの事業についての報告 ・平成8年度いわき市民ギャラリー収支決算書 ・現在までに開催された展覧会及び講演会等 ・解散宣言
いわき市立美術館友の会役員会	会議資料	平成9年12月16日	・新年会について ・シャガール展グッズ販売の報告について ・役員交流研修会の決算報告について
戦后いわきの官民一体・文化芸術運動系図	手稿	令和2年10月7日	
図-2 いわきの美術活動の経緯	手稿	不明	・いわきの美術活動の経緯 ・いわき地方における芸術文化の重要性とその向上 ・地方美術の実例

表2 いわき市民ギャラリー関連年表

「社会、美術館建設の動き」には、以下の資料を主に参考にした。	
三 十 年 誌 編 集 部 会 編『三十 年 の あ ゆ み』いわき市文化団体連絡協議会、1998年。	
『いわき市立美術館』（美術館紹介冊子）いわき市立美術館、2007年。	
山崎保寿氏所蔵資料より	
・『いわき市美術館建設審議会』（第1回、第3回、第4回、第5回、第6回、第7回）資料	
・『いわき市美術館建設基本設計審査委員会』（1981年1月8日）資料	
・『いわき市美術館設計の説明会』（1981年10月19日）資料	

「いわき市民ギャラリーの動き」には、以下から抽出した情報を記載した。	
・ 山崎保寿氏所蔵資料より、昭和52、53、54、56年総会資料の「事業報告」、及び平成9年解散総会資料の「現在までに開催された展覧会及び講座会等」	
・ 当館所蔵の「昭和59年度いわき市民ギャラリー総会要項」	
・ 「ロダン展最終日は超満員」『タ刊いわき民報』昭和54年10月15日、「クリムト展に1万余人」『タ刊いわき民報』昭和56年5月19日（凡例）	
・ 色付きの部分 は総会資料による事業報告が入手できた期間	
・ 特に記載が無い場合、会場は文化センター	

西 暦	和 暦	社会、美術館建設の動き	月 日、件 名	備 考
1945	昭和20	終戦		
1962	昭和37	全国総合開発計画		
1966	昭和41	いわき市制開始		
1969	昭和44	いわき市文化団体連絡協議会発足		
1971	昭和46	社会教育施設の計画において「文化会館（美術館）」の文言が記載される		
1975	昭和50	いわき市文化センター開館		
		第9回現代美術選抜展		
1976	昭和51		5/23 佐藤忠良と語る会 6/17 いわき市民ギャラリー設立総会 6/24 幹事会 6/29 会報『いわき市民ギャラリー』第1号発行 7/2 クロッキー講座初回 7/16 絵画研究講座初回 8/17 展覧会部会役員会 8/22 第1回市民スケッチ大会 10/23 幹事会 11/9 いわき市民ギャラリー臨時総会 11/22 76福島現代美術展 -11/30 11/24 秋原英雄と語る会 1/27 市民ギャラリー広報会議 3/25 幹事会 4/6 会報『いわき市民ギャラリー』第8号発行 4/7 実技講座開催 6/14 幹事会 6/28 いわき市民ギャラリー総会 8/21 第2回市民スケッチ大会 9/19 斎藤清と語る会	参加者120名 以後昭和52年3月までに7号まで発行 以後月に2-3回、金曜日に開催 毎月第3金曜日に開催 東磐梯五色沼、参加者103名 第15回福島県芸術祭主催行事、64点（県内ゆかり作家30名）、入場者9932名 参加者51名 以後昭和53年3月までに14号まで発行 毎週金曜日に開催、毎回30-40名参加 スローガン「いわきに美術館を！」が採択される（7/5発行の会報『いわき市民ギャラリー』第10号にて報告） 大津港付近、参加者83名 参加者100名
1977	昭和52			

1978	昭和53																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																				
------	------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

1980	昭和55	11/16 第1回いわき市美術館建設審議会 市民ギャラリーから若松、松田、山崎が参加	9/22 -10/14 ロダン展 彫刻75点デッサン30点、入場者36,400人 (「ロダン」展最終日は超満員)『タ刊いわき民報』昭和54年10月15日)
	昭和55	1月 いわき市美術品選定委員会が設置される 2/26 第3回いわき市美術館建設審議会 他館の視察結果が報告される 3/1 第1回いわき市美術品選定委員会 最初の10点が承認される 3/11 美術に関する懇談会 3/31 第4回いわき市美術館建設審議会	※昭和56年度総会資料によれば、昭和55年度は実技セミナーを毎週金曜日に開催。また各部会会議を随時開催。 5/12 マンガン展打ち合わせ 読売新聞社、参加者2名 6/5 マンガン展見学及び打ち合わせ 伊勢丹美術館、参加者1名 6/11 展覧会部会打ち合わせ 6/18 いわき市民ギャラリー総会
		6/28 いわき市美術館建設審議会施設部会 7/10 いわき市美術館建設審議会施設部会	7/20 市民スケッチ大会 矢祭山・袋田の滝、参加者80名
		7/24 いわき市美術館建設審議会施設部会 7月 美術館・博物館建設準備室を設置 8/18 第5回いわき市美術館建設審議会	7/23 マンガン展 油彩65点水彩39点、入場者16,362名
		9/2 第6回いわき市美術館建設審議会 9/10 第7回いわき市美術館建設審議会 9/26 いわき市の美術館について(答申)	8/20 美術講演会 講師：中原佑介、参加者80名 8/31 美術館めぐり 栃木県立美術館・益子参考館、参加者49名
1981	昭和56	1/8 いわき市美術館建設基本設計審査委員会	10/22 -10/26 市美展選抜展 植田公民館、入場者782名
		10/19 12月 いわき市美術館設計の説明会 工事着工	1/20 美術講演会 講師：美術評論家 中原佑介、入場者40名 1/29 クリムト展見学及び打ち合わせ 伊勢丹美術館、参加者5名 2/17 幹事会 浜坊 3/12 クリムト展主催者会議 3/12 幹事会 3/19 美術講演会 講師：美術評論家 中原佑介、入場者50名 4/25 -5/16 クリムト展 油彩18点素描90点、入場者10,277名 (「クリムト」展の1万余人)『タ刊いわき民報』昭和56年5月19日) 6/29 いわき市民ギャラリー総会
1982	昭和57		
1983	昭和58		※昭和59年度総会資料によれば、昭和58年度は実技セミナーを毎週金曜日に開催。 7/4 いわき市民ギャラリー総会 7/4 宮川寅雄先生の講演会 8/28 役員会 11/3 美術館めぐり 宮城県美術館

		11月	工事完成			11/21 -11/30	83福島現代美術展	絵画・版画・彫刻など57点（県内ゆかり作家25人）、入場者数不明
						11/26	現代美術展開催祝賀市民のつどい	ニューしゃくなく会館
		12月	美術館条例を議決			11/28	林紀一郎先生講演会	
1984	昭和59	4月	美術館組織発足、開館			1/29	役員会	
						2/18	役員会	会長宅、市立美術館落成記念行事（テレビPR）打ち合わせ
						6/24	いわき市民ギャラリー総会	
1985	昭和60					7/20 -8/25	若松光一郎 半世紀の歩み展	
1987	昭和62					11/20- 11/24	いわき新鋭10人展	49点（いわきゆかり作家10人）、入場者数不明
1989	昭和64					3/20- 3/29	北郷悟彫刻展	
1990	平成2					3/20- 3/29	いわき新鋭9人展	33点（いわきゆかり作家9人）、入場者数不明
1997	平成9					8/24	いわき市民ギャラリー役員会	
						10/24	いわき市民ギャラリー総会	解散宣言が出される